正倉院年報

一　染織品の整理

昭和四九年度の染織品の整理は、南倉所属「幡類残欠百参拾八裏」のうち、昨年七月に着手した一二八号辛櫃収納分の展開整理を続行し、あわせてその調査も実施した。また中・南倉の諸辛櫃の古裂小片を、織法・染法・用途などから分類整理し、帖装古裂七冊を作製した。以下にそれらの整理品目・数量と主なる特徴などを記す。

なお記述中、綾と錦の文様の洋数字番号は本誌一二号所載「正倉院の綾」と同一三号「正倉院の錦」の図版番号にあたる。

一　第一二八号櫃展開整理品

(1)　錦道場幡残欠　二三旒また残片八片

(2)　錦五坪道場幡残欠　二旒また残片二片

(3)　羅道場幡残欠　一二旒また残片五片

(4)　錦・羅道場幡脚残片　五片

右四件は題箋の銘記などから、すべて聖武天皇一周忌斎会用であることがわかる。形式は本誌二五号「正倉院年報」に記したとおりであるが、そのうち羅道場幡の一旒は、頭部にかつてみない非常に珍らしい刺繍が施されている（図版1）。紫綾の地裂の表裏に両面繡いの手法で、松・竹・しだれ花などの風景文様をあらわし、色は紫・黄・白・縹・緑・赤・茶などで、それぞれ濃淡があり、すこぶる多彩である。過去に整理した羅道場幡の頭部の刺繍は、花葉文や花蝶文など三、四種類に限られており、今回の発見はこの系統の幡に対する既往の概念を破るものとして、注目される。頭の巾三八センチ。

また錦道場幡中の一旒は表裏に題箋が付く。一周忌道場幡の題箋は幡身片面に一枚付くのが通例で、今回発見のこの特殊例は、多分誤って両面に貼ったのであろう。

(5)　碧地錦幡頭残片　一片

碧地でNo.85の唐花文錦製。縁に白絁の下貼りが僅かに残り、頂には平組帯を付けた痕跡が襷型の浸みになって認められる。縦約七〇センチ、現巾約一〇八センチ。法量や形式からみて、宝庫に現存する聖武天皇一周忌斎会用の大灌頂幡の類品と思われる。

(6)　大灌頂幡脚残片　六〇片

(7)　大灌頂幡脚垂端飾残片　一片

この二件も大灌頂幡の残片である。脚は綾地で随所に別色綾の花形裁文を貼る。六〇片中二片は、前号図版のものと同様に、片端を斜め内寄

りに裁っている。また地裂を逸し花形裁文のみをとどめるものもある。垂端飾一片は茶地でNo.104の唐花鳥獣文錦製である。

(8) 錦幡残欠　四旒（図版2）

四旒ともに同一の系統の幡で、それぞれ欠損があるが、綜合するとほぼ元の姿がわかる。すなわち頭は錦、頭縁は綾、身はすべて紺地のNo.91の花鳥文錦の両面あわせで、全四坪。坪界と身の左右縁も錦、各坪内は細巾の紫絁で×型に四分している。図版のものの頭部はNo.98の鳳形錦である。身長約二四〇センチ、身巾約五〇センチ。脚は綾と夾纈絁で四条らしいが四旒中一旒の下辺に僅か残るのみ。

(9) 夾纈羅袷（あわせ）幡残欠　二旒

二旒とも身部の残欠で、絁二枚の芯の両面に夾纈羅を貼り重ねた計四枚あわせだが、破損が多い。縁と坪界は紫綾。二旒中一旒に綾と絁の脚の分離片三条が付属している。

(10) 夾纈羅単（ひとえ）幡残欠　四旒また残片二片

頭は赤地唐花文錦、頭縁はNo.91の緑地花鳥文錦、身は夾纈羅のひとえで三坪、身縁と坪界は紫の綾または絁、脚は夾纈羅と絁で四条とする。四旒中一旒は比較的保存が良いが、他はみな上方を失う。身長約二七〇センチ、脚長三八五センチ前後。なお残片二片はいずれも頭部である。

(11) 綾幡残欠　一旒

頭欠。身部はNo.83の葡萄唐草文白綾のひとえで三坪、身の上縁は紫綾、左右縁と坪界・下縁は蔦纈絁。諸色の絁の脚七条が付き、脚端にも諸色の糸房を連ねる。身現長約八五センチ、脚長一八〇センチ前後。

(12) 麻布芯綾幡頭残片　一片（図版3）

頭はいま三角形の麻布の芯だけになっているが、その両面に紫綾が僅か付着しているから、もと両面にこの綾を重ねていたらしい。頭の下縁はNo.41の緑地狩猟文錦で、その下に同文紫地錦の幡身が少し付く。頭の縦約四五センチ、巾約八〇センチ。大灌頂幡に次ぐ大型だが、この種類の幡は過去に類品が発見されておらず、全貌がわからない。

(13) 各種幡脚残片　一〇片

綾・絁・羅製で、なかには夾・蔦纈染を施したものもある。道場幡と大灌頂幡以外の種々な幡の脚の分離したものである。

(14) 天蓋残片　四片

四片中二片は、どちらも緑地錦と赤地錦の二重錦の下に錦と紫綾の二種の垂飾を付けていて、同一系統に属するらしい。あとの二片はそれぞれ別系統と思われる天蓋の垂飾残片で、その一片は表が黄綾地宝相華文刺繍で裏が淡褐絁、下端を剣先形とする。もう一片は黄地唐花文錦の表に緑地目交絞りの綾の裏裂を付け、下方を紡錘形に裁っている。

(15) 紫綾衣服残片　一片

No.67の小唐花文紫綾のひとえ。共裂製の上げ首形の襟とトンボ玉一箇が付いている。袍の残片と思われる。

(16) 褐色布前裳残欠　一腰（図版4）

褐色麻布製。紐は白絁。縦約六三センチ。

(17) 花喰鳥刺繍残片　一片（図版5）

花座上に立つ鳳凰ふうの花喰鳥の刺繍。台裂は白羅で、芯は白絁二枚を重ね、背はNo.24の網目四菱文白綾を貼る。片面刺繍で、繍い裏は綾の背裂により隠されている。繍法は平繍いに一部鎖繍を交え、配色は暈繝を基調に紫・赤・緑・黄などと多彩で、随所に金・銀糸も加える。鳥の長約三四センチ。用途と全容は不明だが、規模といい意匠といい、正倉院刺繍中の優品ということができる。

(18) 花鬘帯残片　一条

(19) 紫綾錦縁帯状裂残片　六条

(20) 使途不明各種裂片　八片

二　帖装古裂

(1) 七五二号　一冊　道場幡垂端飾残片一三三片を貼る。

(2) 七五三号　一冊　夾纈羅幡残片五三片を貼る。

(3) 七五四号　一冊　目交絞り染および暈繝夾纈の綾・絁残片一八四片を貼る。

(4) 七五五号　一冊　諸色の縮絹および薄絁残片一二二片を貼る。

(5) 七五六号　一冊　赤・紫絁残片一〇二片を貼る。

(6) 七五七号　一冊　青・緑絁残片一九七片を貼る。

(7) 七五八号　一冊　白絁残片一一五片を貼る。

以上は、中倉八四・八六・八七・八八・九〇・一〇八の各号辛櫃中の小片、および南倉一二六・一二七・一二八の各号辛櫃の幡類その他の展開整理中に伴出した裂片類である。

（松本　包夫）

二　皮革品の修理

一　紺玉帯残欠　中倉八八

一　革帯三条（五、六、七号）　南倉一四一

一　履一隻（一七号）　南倉一四三

共に修理前の姿は前年度のものとほぼ同様で、いずれも変形している形態を整形し、切損、破損した部分は、革をあてたり、あるいはそのままで樹脂にて接着す。主なる特徴は左のとおりである。

紺玉帯残欠　三本を継いで一条となしたものであるが、五片に切損する。先端の鉸具は銀製、尾端の鉈尾、中間の巡方三箇、丸鞆七箇は紺玉製にて裏座には銀をあて銀鋲にて止める。復原接続の明確な三箇所については接続修理し、残る一箇所は接続しないので修理せず現状のままとする。この欠失部は他の革帯の例より推察すれば巡方、丸鞆各一箇を失うものと思考す。なお全体の仕上りの姿は、本帯付属の螺鈿箱に入るように本来の曲りぐせをそのまま生かした状態で修理した。修理後総長一五六センチ

革帯五号　帯革は二本を継いで一条となす。鉸具の環及び刺鉄、鉈尾及び丸鞆一箇を欠失す。欠失した鉈尾、丸鞆は「南倉一四一革帯残欠」中より法量、品質、形状のあうものを選出して補う。巡方・丸鞆の取付

け位置と箇数は先端方より、丸・巡・巡・丸（六箇続く）・巡・巡・丸の一二箇である。修理後全長一六一センチ

革帯六号　三本を継いで一条となす。鉸具の環及び刺鉄を欠失す。巡方・丸鞆の取付け位置と箇数は右五号に同じ、修理後全長一五七・五センチ

革帯七号　二本を継いで一条となす。鉸具と鉈尾を欠失するが、「南倉一四一」より選出取付く。巡方・丸鞆の取付け位置と箇数は先端方より丸・巡・巡・丸（五箇続く）・巡・巡・丸の一一箇である。修理後全長一五四・五センチ

履一七号　形式はこれまで修理のものと同じ。心の麻布は二枚、花形表面に白色顔料にて唐草文を描く。底裏に泥付着す。履内底に墨書あり「一中　茨田黒万呂」。また内敷は簡筵を心として麻布でつつむ。表に墨書あり「土」　長二六センチ　幅八・五センチ　（関根真隆）

三　経巻の修理・調査

(一)　修理

昭和四九年度における聖語蔵経巻の修理は、前年度に引き続き乙種写経三〇巻と宋版経一〇帖とを完了した。聖語蔵経巻目録（昭和五年当時奈良帝室博物館内正倉院掛発行）による内訳は次の通りである。

乙写一〇八号正法念処経巻四四から、一一一号涅槃経本有今無偈まで三〇巻。

宋版五号大方広仏華厳経巻三九（乙）から、同経巻六二まで一〇帖。

乙写三〇巻はいずれも巻子装で、褾は褐色紙、本紙は白紙または黄紙、軸はおおむね黒漆塗棒型朱頂割軸、褾には麻または絹の経紐を具す。うち一〇九号泥梨経には次の巻末墨書がある。

承徳二年三月十日未時許於比叡山西塔院　写畢　四天王寺一切経之内僧真厳

なお他の巻々にもそれぞれ「一交了」「交了」「比校了」などの巻末墨書がある。次に宋版一〇帖は折本装で、褾・本紙ともに褐色紙、尾題のあとに字解（反切）があり、巻末見返しに「祖師」と題した版画がある。いずれも実叉難陀訳の八十華厳である。

修理に際しては、乙写・宋版とも旧態を損じないよう虫損破損の個所を補修し、褾あるいは褾題を逸失せるものはそれぞれ新補した。宋版は破損が甚しいためすべて総裏打を施した。なお修理の結果、経巻目録の記載を訂正すべきは左の通りである。即ち宋版五号大方広仏華厳経巻二七断簡は、巻五〇（乙）（実は巻二七）に属すべき断簡であることが判明したので合併修補、また巻三九（乙）は前年修理した巻三九（甲）と元来一帖のものであることが判明したので合併修補、従って同経巻二七断簡と巻三九（乙）は目録から削除する。また同経巻四三、巻四八、巻五〇（乙）は、それぞれ実は巻二三、巻六八、巻二七であることが判明したので、目録の記載を訂正する。

(二) 調査

昭和四九年度における経巻の調査は、乙写二三号大般若経巻四八三から、三八号経律異相巻二三までの九〇巻について行ない、各巻について調査書を作成した。調査の結果、乙写二三号大般若経のうちの巻五一六は実は巻五三六、巻五二三は実は巻三二八、巻五八六は実は巻五八四であることが判明、また経巻目録に数目不明として記載されている四巻のうち三巻は、それぞれ大般若経巻一四七、巻三一一、巻五四四であること、残る数目不明一巻は断簡五片を収集せるもので、うち二片は大般若経巻五七五と巻五八〇の末尾であることが判明した。以上経巻目録の記載を補訂する。次に調査した経巻の銘識のうち、本誌に未掲載のものを左に掲げる。銘識はすべて墨書である。

乙写二三号大般若経巻五三四

巻末云「願主僧定秀結女佐伯氏　為過去慈父悲母尊霊往生極楽也

元亨二年壬戌十二月廿四日毎日一巻分第三□奉転読畢　実聴　元亨元年辛酉五月廿四日毎日一巻分第三□奉転読畢　実聴　元応元年己未九月廿四日毎日一巻分□奉転読畢　実聴」（図版6）

巻末紙背云「元亨四年甲子八月廿四日毎日一巻分第四□奉転読畢　実聴　正中三年丙寅四月四日毎日一巻分第七□奉転読畢　実聴　嘉暦二年丁卯十月十四日□巻分第六（マヽ）奉転読畢　実聴」（以下墨書六行）（図版7）

同巻五六八

巻末云「以証本句切一校了　近玄」

同巻五六九

第一六紙背云々「赤尾ノ文仏言天王此天神衆云々今検諸本以妻室本云諸天神衆云々但一切本皆此天神衆云々松室本剰此字作諸字若依妻室本歟同点本故頼信公本剰此字作彼字彼天神衆云々未得其意勝天王般若ノ此諸天子云々今案此天神衆云々好歟吉歟勝歟」（図版8）

第一七紙背云「赤尾云唯有井与雑（マヽ）有井雑（マヽ）有或□（本カ）唯字勝云々仍雑（マヽ）字謬歟」（図版9）

同巻五八七

巻末云「願以此功徳普於一切□□与衆生皆俱成仏　於此巻者為応妻如意尊霊□□□（離垢得達カ）□　長寛三□□（年カ）書」

乙写二四号中論巻一（甲）

巻末云「法隆寺末覚僧延清文也」

同巻一（乙）

裏見返し云「付属助覚□」

巻末云「永久五年丁酉十一月十七日東大寺」（以下二行判読不能）（図版10）

乙写二六号倶舎論第二三

巻末云「一校了　伝領良賢（花押）」

（柳雄太郎）

四　刀剣類の研磨

第二次刀剣類研磨計画第八年度として本年度に研磨を了したものは次のとおりである。

名称・号数	全長cm	刃長cm	重量g
無荘刀第四二号	五六・九	四五・一	一一一五・八
鉾第三二号	二七・五		五三八・〇
十合鞘刀子第一号	一三・三	八・四	七・六強
十合鞘刀子第二号	一四・二	九・五	八・八強
十合鞘刀子第三号	一二・三	六・九	八・一弱
十合鞘刀子第四号	一三・七	七・七	七・三弱
緑牙撥鏤把鞘刀子	一〇・四	七・九	五・〇強

十合鞘刀子、緑牙撥鏤把鞘刀子は共に『献物帳』所載のものである。正倉院の刀剣には作者名すなわち銘を切ったものは一口もないが、緑牙撥鏤把鞘刀子の茎には鏨で「三」と切りつけており、何らかの符牒であったとおもわれる。

（関根真隆）

五　宝物の模造

本年度は、中倉納物粉地彩絵八角几模造二カ年計画の第一年度として、素地及び彩色下画の製作を行った。

本宝物は、数ある献物几の中では最も保存がよく、奈良朝彫彩色の代表的工芸品として今日にその姿をとどめている。

本宝物を模造することは、当時の工芸材料・技法などについて多くの知識を提供すると共に、宝物の活用の上からも必要なことである。

模造の報告を行うに当たり、まず宝物について記述する。

〔素　地〕

この八角几は床脚付きであり、使用材はすべて檜を用いている。天板は柾目の一枚板で八稜形につくり、長径四一センチ、短径三八・六センチ、厚さ一・七センチ。天板側面は下端六ミリを八稜形に沿って奥へ五ミリ削り込み上下二段に作り出す。天板裏面中心にはぶんまわしの跡らしき小孔が認められる。

床脚は八本の脚柱で天板を支える形をとる。脚柱は柾目材を横に使用し、外面中央部縦に稜を立て僅か胴張りとし、その左右は凹面に刳り、脚柱間には香狭間を透す。内面は外面に沿った刳り込みを施す。脚柱の高さ六・七センチ、幅最狭部で二・四〜二・九センチ、厚さ八ミリ前後。

下框は各香狭間毎に作り出した八片を脚柱真下で枘接ぎし八稜形に廻らす。材は板目で幅二・三センチ、厚さ六ミリ。側面上方は外郭線に沿って一段刳り下げ上下二段となっている。

天板と脚柱は、天板裏面の枘穴に脚柱上端を差し込み、鉄釘を脚柱両側の刳形下面より各一本ずつ打ち固定している。脚柱と下框は芋付けとし、下框下面より脚柱稜の左右へ向けて鉄釘を二本打ち込んでいる。使用せる鉄釘は無頭角柱形のものであり、X線写真より長さが二・五セン

チ前後と知れる。宝物の総高は九・三センチである。

工作は部分的には粗雑な個所も見受けられるが、材の選択・使い分けを良くし、仕上げも丁寧であることなどから手なれた工人の作になるものであろう。

〔彩　色〕

本宝物の彩色は、緑青・群青をはじめ種々の顔料・染料により複雑な花文を描いた奈良時代の典型的な暈繝彩色であり、又その文様も奈良朝様式をよく伝えるものである。

花文を描くのは、天板側面、脚柱表面、下框上段上面・下段外側面であり、それ以外の面は主に単色塗りである。使用色材は下地に白色顔料、これはX線に対する透過性より鉛白でないことは確認できたが、白土か胡粉かは不明。暈繝彩色には、白色顔料以外に、緑青・白緑・群青・朱・丹・墨の六種の顔料と烟脂・藍・藤黄の三種の染料が用いられていると推定される。

以上、粉地彩絵八角几の概要を述べてみたが、模造に当たっては、復原模造の基本方針に則り、素地については出来るだけ良くかれたヤニ気の少ない檜の古材を用い、可能な限り宝物に合わせて木取りし、各部の接合も宝物のそれと同技法とした。製作は坂本曲斉氏に依嘱し、模造仕様書と模造図面に基づき指示を行うとともに、X線写真を含む資料類を参照させ、必要に応じ担当職員立会いのもとに正倉院事務所において宝物と照合を行った。

下画作製については山崎昭二郎氏に依嘱した。下画は第二年度の本彩色を念頭に置き、全文様につき大きさ、位置などの相互関係を詳細に実測しつつ紙上に描き写した。暈繝の種別、使用色材の種類などについても注記した。又、下画作製の一作業として手板の作製も行った。これは使用顔染料の種類を見きわめ、描法について宝物の試作実験等をするためのもので、天板・脚柱・下框を模した手板二組に各種白色顔料を塗布した後、下画を参照しつつ花文暈繝彩色を施した。　（永嶋正春）

六　秋季定例開封

昭和四九年度の定例開封は一〇月一五日から一一月二二日まで三九日間にわたり、その間つぎのような事業が行われた。

㈠　開、閉封の儀

一〇月一五日午前一〇時より西宝庫各倉の勅封を順次取り解き、田中直侍従は後藤四郎正倉院事務所長の先導により巡検、倉内の無事を確認した。またこれに引続き東宝庫内の聖語蔵経巻収納戸棚の宮内庁長官封を解いた。

一一月二二日午前十時より山本岩雄侍従は後藤正倉院事務所長の先導により西宝庫各倉を巡検、庫内の整備状況を点検のうえ、勅封が施された。また引続き東宝庫内の聖語蔵経巻収納戸棚には宮内庁長官封が施された。

㈡　宝物、宝庫の点検、手入等

開封期間中、天候不良の場合を除き予め定められた日程に従い、宝物の保存管理、学術調査など種々の関連事業が行われたが、そのうち保存管理関係は、宝物の保存状態点検、防虫剤交換、宝物台帳用写真撮影、空調機械類の点検などであった。また刀剣類約一八〇口の油曳き手入れは東京国立博物館刀剣室長加島進氏に委嘱して行われた。

㈢　宝物の調査

(1)　木工品調査

四七年度から始まった本調査は、今年は第三年目で、木画などの装飾あるものを中心に北倉の螺鈿紫檀琵琶以下三五点を対象とし使用材料、技法などにつき調査が行われた。また鉋以下二一点の工匠具も参考品としてあわせ調査された。

調査員には、記録作成等の措置を講ずべき無形文化財の保持者竹内碧外、重要無形文化財保持者氷見晃堂（病気不参加）、元奈良教育大学教授島倉巳三郎、東京国立博物館法隆寺宝物室長木内武男の四氏が委嘱された。

(2)　金工品補足調査

四五年から始まった第二次金工品調査は、四七年までに当初予定の対象品を調査し終ったが、若干の未解決の問題を残していたので補足調査を行った。調査したのは北倉納物御鏡第二号以下二六点で、調査員には奈良国立博物館長蔵田蔵（十月十三日死去）、元東京芸術大学教授内藤四郎、東京芸術大学教授三井安蘇夫、同鈴木信一、東京国立博物館金工室長中野政樹の五氏が委嘱された。

(3)　その他

先年当庁が専門学者に委嘱して行った伎楽面調査に際して、実測図作成のために写真測量（等高線写真撮影）が行われたが、一部撮りなおしを必要とするものがあるとの理由で、奈良国立文化財研究所長の申し出により、伎楽面第五号以下二六点の再撮影が行われた。撮影には東京大学教授丸安隆和氏（伎楽面調査員）が監督に当り、奈良国立文化財研究所所員、東京大学技官ら六名が従事した。

以上の諸調査のほか、正倉院事務所保存課職員による漆工品の襯（うちばり）の調査、東京大学史料編纂所員の大日本古文書校合のための正倉院古文書調査、東大寺図書館員の聖語蔵経巻調査などが行なわれた。

㈣　宝物の出陳

本年は、北倉納物三合鞘御刀子以下六四件七二点の宝物、経巻が奈良国立博物館に出陳され、正倉院展として一般公開された。

宝物は一〇月二一日に搬出、同月二六日を特別招待日とし、翌二七日から一一月一〇日まで一五日間にわたって公開された。展覧会を終って一一月一六日に宝物は還納された。

宝物の選定に当っては宝物保全の面から慎重に検討を加え、公害による汚損を蒙むる恐れのあるものを除外した。また著名な優品に偏ることなく、現在なお正倉院事務所において続行中の染織品整理の成果をも盛

り込んで、正倉院宝物の幅広い内容を、限られた範囲内に出来るだけ反映し得るよう配慮がなされた。

出陳品目

北倉　三合鞘御刀子　但し刀身を除く　一口
通天牙笏　一枚
緑牙撥鏤尺　二枚のうち小　一枚
新羅琴　金薄輪草形　付柱六　一張
円鏡　雲鳥背　第一七号　一面
漆皮箱　右鏡の箱　一合
円鏡　山水花虫背　第一八号　一面
薦纈屏風　鸚鵡　一扇
揩布屏風袋　緑地馬木形　一口
龍角　若干
槻合子　一合
雷丸　若干
雷丸袋　一口
薬壺　一口
薬垙　一口
青斑鎮石　二挺
延暦十二年六月十一日曝涼使解　一巻

御物納目散帳　一巻
中倉　正倉院古文書　第二一、二五、四二巻　三巻
続修正倉院古文書　第二八巻　一巻
続修正倉院古文書別集　第九、一三巻　二巻
正倉院塵芥文書　第三九巻　一巻
紅牙撥鏤尺　第四号　一枚
最勝王経帙　一枚
大乗雑経帙　付「第十一帙」牌　一枚
経帙牌　牙、「初帙大乗部」、「灌頂」　三枚
犀角坏　一口
白瑠璃高坏　一口
赤漆欟木小櫃　一合
木笏　一枚
白牙把鞘刀子　第二五号　刀身を除く　一双
斑犀把鞘刀子　第四四号　刀身を除く　一口
粉地彩絵箱　第三三号　一合
白檀八角箱　第三五号　一合
粉地木理絵長方几　第十四号　付褥　一枚
南倉　磁皿　甲一一、乙六、丙一〇　三口
金銅六曲花形坏　一口
金銅小盤　一枚

佐波理加盤　第一号　一重
箜篌　螺鈿槽　付模造　二張
子日手辛鋤　乙号　刃新補　一口
赤地錦半臂　雑楽の四　一領
縹夾纈布袍　（南一二九の五）　一領
白絁袷下袴　（南一三六の一二）　一口
革帯　（南一四一の一、一〇）　二条
錦襪　（南一四二の七）　一両
履　（南一四三の四、九）　二隻
褥　（南一五〇の一八、二二、三三）　三張
東宝庫　絁襟布衫　第二号　一領
山水夾纈屏風　第六号　一扇
鹿草木夾纈屏風　第九号　一扇
揩布屏風袋　第一二号　一口
錦道場幡　玻璃装二〇号　一旒
大幡垂脚残片　一二六号櫃中六三、七六　二片
大幡垂端飾　旧玻璃装四号　一枚
聖語蔵経巻
隋経第一号　賢劫経　巻二　一巻
唐経第五号　大智度論　巻二　一巻
天平十二年御願経第一一六号　大方広十輪経　巻一　一巻

㈤　正倉院展講座

一一月九日、奈良国立博物館における公開講演会に、柳雄太郎技官が出講し、「正倉院の曝涼・出納関係文書について」と題して講演を行った。要旨については本誌所載「正倉院北倉の出納関係文書について」参照。

（阿部　弘）

七　保存科学的調査

正倉院においては、東西両新宝庫とも空気調和装置を設備し、担当係官の細心の注意の下で運転を行っている。これら空気調和の効果を確認し、あるいは汚染の早期発見をすることは、宝物保存上極めて大切なことである。

この目的に添うために、従来より金属板表面生成物調査を実施しており、今年度も例年どおり神戸大学工学部永田三郎教授に依頼した。

金属板試料は東西両宝庫及び西宝庫空調系統内の合わせて六カ所に設置した。試料からは例年と同じく微量の硫化物が検出されている。しかし、例年に比べて変色が少なく、偏光解析による表面生成物の膜厚測定や透過電子回折などの調査結果は良好であった。西宝庫については、前年度秋に活性炭フイルターを空気調和装置本体集塵器前の還気ダクト中に新設しており、その効果かとも思われる。

次に実験室の整備改善を行った。旧来より保存課地階に実験室を設

け、小型の実験台を配置していたのであるが、昨年度の保存科学担当職員の配置に伴い、本格的な実験室を設けることになった。

今年度は、電気・ガス・上下水道の新設・改修及び床面の防水工事を行い、今後の実験機器設置の基礎とした。さらに、大型の中央実験台を購入設置するとともに、分析用天秤、空気汚染調査用機器類などを購入し、来年度からの空気汚染調査の準備とした。（永嶋正春）

八　調査報告書の刊行

漆工芸は東洋に興り、特に我国に於て著しい発展をみたものである。その我国に於ける黎明期がちょうど、中国文化を広汎に受け入れた飛鳥・奈良時代にあたるのである。正倉院には、今日の漆芸の源をなす優れた技法を示す遺品が非常に多く蔵されており、その技法の既に絶えて久しいものもある。さらにこれらは文献的にも裏付けされ得るものが少なくはなく、貴重な文化遺産の一大宝庫と言われる所以である。

これら漆工品の調査が昭和二八年から同三〇年にかけて松田権六・吉野富雄・溝口三郎・岡田譲・北村大通の各氏によって実施され、ついで昭和四三年から同四五年までと同四八年に松田・溝口・岡田・北村・荒川浩和の各氏によって実施された。かくして前後三度に亘る正倉院の漆工に関する全般的学術調査は完了し、その結果をこのたび『正倉院の漆工』（平凡社発行）として公刊した。

本書は、ほとんどの漆工品を対象としたものであり、構造・技法（素地・塗漆・加飾）・材料・文様・状態などの各項目について述べられている、中でも漆工材料とそれにつながる技術の解明に主力が注がれ、その成果をここに披瀝するにはあまりにも紙数が少なく、又枚挙に遑がない。なお論考として各調査員による新しい知見や研究成果を一括収録した。

その他個別解説・実測図・用語解説・英文解説をつけ、また多数の原色図版と単色図版を収録し、さらにX線透過写真もそのデータと共に初めて斯界に提供されることとなった。

これによって正倉院の漆工の全貌がはじめて詳細に公開されるに至ったわけである。（木村法光）